

明代春秋学における「改元」説——熊過の「元年」注釈を中心として

胡華喩

本研究は、儒教の春秋学において、明代の中葉に現れた熊過の「改元」説を考察する。

春秋学では、『春秋』の冒頭に記された「元年」の解釈は、『公羊伝』が言うように、孔子が特別に周王専用の「元」を魯の紀年に用いたという「王魯」の義か、或いは『左伝』による、君主の即位年を記録して暦に表示する「紀年」の義か、両者が論争となっていた。性理学を基に「元即仁也」を強調した胡安国（1074－1138）の「体元」説は、元延祐元年（1314）科挙試験再開後に三百年を超えて、明代に春秋学の主流と見なされた。これに対し、熊過（1506－？）は中唐期以降春秋学の「即位改元」を変容しつつ、「改元」説を提示した。熊過について、『明史』では「嘉靖八才子」以外、ほぼ記録を残さなかった。本研究は、彼の『春秋明志録』「隱公元年」をめぐる注釈に基づき、その「王者而後改元」という主張及び宋胡安国・元呉萊（1297－1340）・趙汭（1319－1369）説への論駁を考察し、彼の「改元」説とそれを生み出した経緯を考察する。

熊過は「即位の礼」の完成を基準とし、「元年」とは紀年という時系列に物事を記して年数を数えることのみでなく、大宗・小宗という嫡庶の関係を区別する機能を果たしていると考えた。「元年」注釈を通じ、彼は王・諸侯が「改元」で区別される点を強調し、「王魯」の言葉を「紀年」の義で解釈した意図が見える。このような解釈は、杜預（222－285）が提起して以来、唐宋時代に展開されてきた「黜周王魯」の二項対立の枠を打破した。要するに、熊過の「改元」から、従来明代春秋学への一般印象とは異なる「義例にそわない」思想背景が見て取れると考えられるのである。

以上の論点を踏まえ、本研究ではこの「改元」問題における熊過の葛藤を解析し、彼が「大札の議」に刺激を受けた背景を組み込んで明代春秋学の様子を検討する。